# ボードリヤールと他者性
## ――他者性の喪失問題考察に向けて――

藤井　友紀*

80年代の消費社会論ブームの時代に取り上げられたボードリヤールの理論は，しかしその後90年代以降になると，国内ではほとんど取り上げられることがなくなってしまう。そもそも，国内でのボードリヤールの扱いは非常に断片的であり，また正当な批判も評価もされてはいなかった。しかし90年代以降，彼は初期の作品からの驚くべき一貫性を発揮し，現代社会の抱える本質的な問題へと言及している。当初の彼の課題は，記号化の進展した消費社会でのモノや人間の疎外問題であった。初期の彼の理論では，モノは消費されるために，固有の役割を手放して機能性などの記号の支配下におかれた。90年代以降，彼はさらに合理化が進展し，クローンやヴァーチャルな世界を生み出した現代社会において，人間がかつてモノが辿ったような過程を辿り，すべての葛藤や非合理性を手放してしまおうとしていると警告する。本論では，彼の「他者性」論に視点を置き，合理化を推し進めてきた我々の社会の中で一体何が起こっているのかを考察するための一助としたい。

**キーワード：ラディカルな他者性・スペクトル性・内爆発・合理化・記号化**

**目　次**

はじめに
Ⅰ　ボードリヤールの消費社会
　1　モノの記号化
　　（1）機能的体系
　　（2）非機能的体系
　　（3）メタ機能＝非機能の体系
　2　記号化と消費の理論
　　（1）記号化の進展
　　（2）平等から差異へ
Ⅱ　ボードリヤールと他者性
　1　ラディカルな他者性の発見
　　（1）モデルとコピー
　　（2）ラディカルな他者性
　2　近代化と合理的理性の発展
　　（1）神の死と合理性
　　（2）合理性の「内爆発」
　　（3）欲望の「内爆発」
Ⅲ　消失する他者性
　1　スペクトルな他者
　　（1）幻影的スペクトル性
　　（2）プリズム的スペクトル性
　2　ラディカルな他者性の復讐
　　（1）復讐するラディカルな他者性
　　（2）他者は失われたのか
おわりに

＊立命館大学大学院社会学研究科博士後期課程

## はじめに

本論は，現代社会における他者，および他者性の喪失に関して論じたものである。この「他者」あるいは「他者性」という言葉は，一般的な意味とは少々異なっている。それについては後述するが，この概念をはじめ，本論の論旨の大部分はＪ.ボードリヤールの理論に依拠している。ボードリヤールといえば，旧知の通り，記号の消費社会論の提唱者である。彼の理論は，欧米，特にイギリスを中心に，90年代以降，多くの社会学者によって研究がなされているが，日本では逆に近年はほとんど社会学的領域では取り上げられず，また取り上げられる場合にも，初期作品を中心に，断片的に取り扱われるに留まっている。おそらく国内においてボードリヤールがほとんど取り上げられなくなったことの背景には，彼の理論の分かり難さがあげられるだろう。「ボードリヤールの著作は範囲，領域，スタイル，複雑性において著しく変化する」[1] とボードリヤール研究の第一人者であるマイク・ゲインは述べている。実際，ボードリヤールの用いる用語や概念は非常に多義的で，しかも，従来の伝統的社会学の枠内では捉えきれないものが多く，時には矛盾していると感じることもある。また，当初彼が好んで用いていたマルクスにしろ，その後しばしば使用されるその他の思想家にしろ，ボードリヤールは従来の一般的な解釈とは異なったあくまで独自の解釈のもとに理論や批判を展開する。こうしたところに，彼が日本の特に社会学的領域において敬遠されるようになった主な要因があると思われる[2]。だが実は，ボードリヤールのもっとも大きな特徴は，その問題意識の一貫性と絶え間ない理論の発展にある。「ボードリヤールの業績は……驚くべき統一性を持っている。そこには緊張があり，そこから発する発展がある」[3] とゲインは述べる。実際，彼の問題意識は第一論文である『物の体系』以来，ほとんど変化していない。時折，以前の理論や記述と矛盾すると思われるのは，彼の理論がその時点で問題としている事象に合わせ，また時代や社会状況に合わせて常に変化しているからである。それ故に彼は常にあらゆる分野や社会状況の変化に敏感であるし，現実分析へと向けるボードリヤールの視線は非常に鋭く，的確である。そして彼の中心的問題意識は常にモノや人間自体の存在の「意味」の変化に向けられている。特に，筆者にとっては，彼が近年好んで用いる「他者性」の問題が若者たちの自我について分析する際に非常に重要な鍵となるように思われる。本論は，ボードリヤールの初期の作品と90年代以降の作品を用いて，彼の「他者性」という概念がどのような論理から生まれており，どのような問題として捉えられているのかについて考察したものである。

第１章では，有名な彼の消費社会論における，モノが記号化していく過程について確認する。第２章では，彼の記号論の発展型である現代社会における「他者性」の問題について，主にその概念の内容について説明する。最後に第３章では，こうした他者性が現代社会では失われてしまったという彼の警告について考察することになる。

## Ⅰ　ボードリヤールの消費社会

今日，我々の周囲には様々な消費物があふれ，目もあやな広告が我々の注意を惹きつける。生活を「豊かに」する「便利な」商品が次々と開

発され，我々の生活に組み込まれていく。

現代社会における消費の主体は大衆である。彼らを中心に現代の消費活動は動いている。

Ｊ.ボードリヤールは，消費とはひとつのまとまった価値システムであり，システムとしての機能を全て有していると分析する。彼によれば，生産と消費は，生産力とその統御の拡大再生産という唯一の巨大な過程のことである。だが，システムの至上命令はそれとは逆の形式，すなわち欲求の解放や個性の開花，豊かさという形を取って，人々の日常的な倫理やイデオロギーの中に巧妙に浸透するのだと分析した。

そもそも，ボードリヤールにとって消費社会とは，そして消費社会における差異化や記号の概念とは一体どのようなものなのだろうか。

## １　モノの記号化

ボードリヤールの名を世間に知らしめたのは，1970年に出版された彼の第二論文『消費社会の神話と構造』（以下『消費社会』）である。彼はそこで現代消費社会における記号化という問題を取り上げた。この記号化とコードの問題は，以降30年にわたり，彼の理論の中心的問題となるのだが，この『消費社会』から遡ること２年，1968年に書かれた彼の第一論文である『物の体系』において，彼は既にこの記号化という問題を取り上げている。

『物の体系』における彼の記号論の主眼は，主に人間を取り巻く物的財のもつ象徴的意味の記号化と，記号化した物が作り出す体系の問題を物と人間との関係の様相から読み解こうとするものだった。

彼はこの論文において，物が作り出す体系を以下の４つに分類し，分析を行った。すなわち，機能的体系[4)]，非機能的体系，メタ機能＝非機能の体系，社会＝イデオロギー的体系の四体系である。これらはいずれも，物と人とが不可分の関係の中で影響を与え合うことによって形成されるシステムである。

### （１）機能的体系（Le système fonctionnel）

まず，機能的体系として，ボードリヤールは現代的な家具や，それらの配置・配色に注目する。彼は，現代的で「機能的」な家具に対して，伝統的な家具を対比させて分析した。

彼によれば，伝統的な家庭における家具とは，その家の由来，その家の伝統を受け継ぐものであり，その家の家柄，歴史を示すものであった。また，これらの家具は何がどの部屋に置かれるべきかが明確に決定されていたし，それ故に，置かれている家具が，その部屋にいる人間の行為をも決定していた。つまり，大きくどっしりとした箪笥や寝台は居室に置かれ，同じく大きくどっしりとした時計やテーブルやソファは家人の集合する場に置かれる。そして，寝台や箪笥が置かれているからこそ，その部屋は寝室となり，大きな時計やテーブル，ソファなどが置かれていることによって，その部屋は居間となる。さらに，寝室となったからこそ，そこで人は休み，居間だからこそ，そこに家族が集まり団欒を取る。また，同じ居間の中であっても，家具の配置や物そのものの質を変えることによって，家長の席と子どもたちの席，来客の席などが決定され，座席によって，家庭という場における役割も明確に規定されることになる。

家具（物）と人間とがこのように統合された関係を築いていた伝統的な家父長制的社会においては，家長などの権威を家具が象徴していたし，だからこそ，世代を越えて継承することのできる「重くどっしりとした」家具が好まれて

いた。

だが，こうした伝統的な家父長制が崩れてきた現代においては，家具と人との関係も変化した。ボードリヤールは，現代では動かしにくい重厚な趣の家具よりも，軽く，動かしやすい家具が好まれるようになったことに注目した。こうした家具が配置されることで，その場所は固有の用途に固定された空間ではなくなる。それぞれの家具が置かれていることのみでは，空間は一つの役割に束縛されはしない。

さらに，ボードリヤールはこうした現代的な家具と人との関係に，雰囲気や機能性というファクターを持ち込む。このような，それ自体の機能に固有の意味や役割が与えられず，それぞれの役割も意味も相互補完的になった家具が，どのように選ばれ，購入されるかという問いがそれである。

まず，「機能性」とは何か。かつて伝統的な家具が好まれていた頃には，人はその重々しさ，装飾のすばらしさなどが示す権威などの象徴的なものを基準に家具を選考したが，現代では，そうしたものよりも，むしろ軽い，動かしやすい，片づけやすいことが重要視される。そこでは持ち主にとっての使いやすさ，すなわち「機能性」が重視される。さらに，そうして機能性によって選ばれた家具は，それぞれの空間を隔てることなく，同一の限定された空間に置かれることになる。この時に重要視されるのもまた，持ち主，すなわちその空間に住む者にとっての「住みやすさ」や「生活しやすさ」であって，こうして作られた部屋は「機能的」な家具が「機能的」に配置された空間となる。同様に，「機能的」空間を構成するためには，「機能的」な形（フォルム）もまた重要になる。つまり，限られた空間内においていかに無駄なく空間を利用するかが「機能的」な形という回答をもたらし，「機能的」な形の家具を「機能的」に配置することで，持ち主にとって「機能的」な空間ができあがるという図式である。

だが，こうした「機能的」な空間に必要なのは，それぞれの家具や配置の「機能性」だけではない。そこで呈示されるもうひとつの要素が「雰囲気のディスクール」である。「機能的」な家具を「機能的」に配置するという問題を，「機能的」な家具を生産し，それを最も「機能的」に活用する「技術」の命題であると捉えるならば，「雰囲気」の問題は，それぞれ「機能的」に作られた物同士をいかに「機能的」に統合された様式に見せうるかという「文化」的な命題であるとボードリヤールは主張する。機能性を重視して作られたそれぞれの物は，最も機能的に配置されるが，それはただ単に利用する目的にてらしてのみ「機能的」なのではなく，外観としても「機能的」でなければならない。それぞれの家具や物の持つ色彩や形状もまた機能的でなければならないのである。使いやすさという機能性のみを基準に物を選考した場合，それを一カ所に配置した場合に全体的なバランスにおける色や形状の非統一的な状態が生じうる。もし，配置された物がそれぞれ色や形状などまったく異なる物の集合であった場合，それはいくら「機能的」な物を最も「機能的」に配置したとはいっても，見た目にはひどくバラバラで，どちらかといえば，非統一的な空間に見える。ここで，見た目にも「機能的」な室内を作るために「雰囲気のディスクール」が関与することになる。そこでは，物それ自体の「機能性」に加えて，全体的に統一のとれた色や形が重要視される。その統一のために用いられるのが「雰囲気」である。「シックな雰囲気」や

「快活な雰囲気」など，「雰囲気」という記号体系を用いることによって，「機能的」な配置をなされた部屋は，より「機能的」な外観を得ることになる。しかもそれは，ひとつの物を買い換えたり，全体の配置を移動させたときにも，統合が失われないように全体の配置の中で相対的なバランスを保った色や形でなければならない。さらには，自分以外の誰から見ても「機能的」であるように統一されていなければならない。したがって，「雰囲気」は文化性の命題であると言える。そうした客観的で相対的な差異のバランスが，色や形の文化的な意味での「機能性」である。

こうして，人は技術的にも文化的にも「機能的」な空間を手にする。そこではあらゆるものが「機能性」という記号によって整合された空間が保たれる。だが，こうした人工的に作り出された機能的に整合した世界のなかでは，それを作りだした人間こそが非機能的で不整合な存在となるのだとボードリヤールは主張するのである。

（２）非機能的体系（Le système non-fonctionnel）

第二の体系は，非機能的体系である。先に挙げた機能的体系が文化的・技術的な「機能性」という客観的言説に支えられた体系であるとするならば，非機能的体系は主観的言説に裏打ちされた体系であるといえる。機能的体系においては，物の機能性が重視され，古い重厚な家具は敬遠される傾向にあった。だが現実を見てみると，逆に，そうした物を好んで選択したり収集したりする人もいる。それはなぜか。ボードリヤールはそこで主観的意味の重要性を示す。

例えば，ある人が古物商で古びたひとつの小物箱を見つけたとする。それ自身は蓋が開きやすいわけでも，物を分類しやすいわけでも，手頃な大きさであるわけでもない。その箱の表面に美しい絵が描かれ，見事な彩色が施されていたという，ただそれだけだった。だが彼はその小箱を気に入り，購入した。

実のところ，彼は小物や手紙を入れる箱など探していなかったし，そもそもこの小箱を何らかの用途に使用する心づもりもなかった。実際，それを持ち帰った後，彼はこの小箱を部屋の隅にある棚の上に飾ったが，それは彼の部屋の雰囲気に程良い統一性をもってなじむわけでもなかったし，実際に用いられることもついにはなかった。

彼はおそらく，その表面に描かれた絵画に魅了されたのだろうし，その古びた風情にこれまで幾多の持ち主を経た歴史を感じ，その歴史性に引かれたのだろう。あるいは単に，彼はこうした小箱を収集することが趣味だったのかもしれない。そこでは，客観的に見て機能的だと考えられることよりも，私自身の主観にとってそれがいかに意味を持っているかの方が重要なのである。

ある特定の物を収集することを考えると，より理解しやすくなる。ある画家の絵画を収集している人がいた。その画家の作品は，決して社会的な価値のあるものでも，歴史的な付加価値があるわけでもない。しかし彼はその画家の作品に，何ものにも代え難い魅力を感じている。だが，唯一，手に入らない作品があった。彼は，ある時人づてにその作品の存在を聞き知った。だが問題の作品は現在の所有者にとっても深い来歴があり，決して手放すことはないことも知る。手に入らないことが判ると，なおさら彼はそれが欲しくなる。他の容易に購入できた作品と比べても，彼はその作品に対する思い入れが

強まるのを留めることが出来ない。しかしおそらく，一度その絵を手に入れてしまえば，その魅力は半減してしまう。彼の主観においてその作品にはその稀少性と入手の不可能性によって独自の意味が付与され，それは，状況が困難であればあるほど，ますます強められることになる。

こうした，主観による物の独自性という幻想もまた，物を本来の機能から離れた独自の意味のある記号に還元する。だが，こうした体系は，自らの内に閉じた体系であるとボードリヤールは述べている。

（３）メタ機能＝非機能の体系（Le sysème Méta-et Dysfonctionnel）

一方，これらふたつの体系に対して，残る２体系は，イデオロギー的側面について分析したものである。メタ機能＝非機能の体系は物のイデオロギー的意味作用について，社会＝イデオロギー的体系は物と消費についての社会的イデオロギーの側面から分析されている。後者については『消費社会』における説明の方が詳しいため，後節にて若干触れるに留める。

メタ機能＝非機能の体系において重要となるのは，これまで見てきたような機能性という記号の意味作用の拡大である。それは「自動性」という物の機能の増大に結びついて考えられる。

物の機能性に対する人間の欲求は，そもそも「すべてがひとりでに進行する」ことへの欲求である。日常生活において，ともすれば煩雑な作業でしかない様々な行為による負担を軽減するために，物の機能性は高められていく。全自動洗濯機は手作業での洗濯から人を解放した。同様に食器洗い機や自動車など，いまや，様々な作業が機械によって肩代わりされている。だが，こうした便利さ，すなわち機能性の追求から生まれた便利な商品の開発は，本当の意味での「機能性」を実現し，高めていくものではないとボードリヤールは言う。

もう一度全自動洗濯機を考えてみよう。そもそも洗濯という行為は洗濯板でのこすり洗い，すすぎ，脱水，乾燥の一連の手作業からなっていた。そこにまず二槽式洗濯機が登場し，さらに，全自動洗濯機の登場によって，いまや，一度洗濯物を放り込めば，一台で乾燥機の役割までこなしてくれるものまで現れている。こうして洗濯という作業は，洗濯機に洗濯物を入れ，ボタンを押して待つ。ただそれだけの作業となった。

だが，機能性は一度商品化されてしまうと，規格化・画一化され，柔軟さが追いやられてしまう。こうした機械の発展によって，我々の日常生活は便利になり，機能的になった。だが，全自動洗濯機の機能を考えてみると，設定されたとおりにただ洗い，脱水し，乾かす，それだけの流れに限定されてしまったことになる。人間が手洗いをする時のように，様々な種類の生地が混ざった状態で，ひとつひとつを見極め，異なる方法を柔軟に使い分けることは，機械には出来ない。

自動車の場合を考えてみよう。完全に自動操作の車が開発されたとする。その車は，目的地を設置すれば，自動的に運転してくれる。速度も設定できるし，前の車との距離を自動的に測定し，赤信号では自然に停車する。だが，地図上の最短距離を割り出すことは出来ても，持ち主の気分に合わせた寄り道はできない。この車の機能は，ただ「目的地に最短距離で向かう」という点での機能性のみに絞られているのである。

一度商品化され，規格化されてしまえば，「この機械はこういうもの」という固定観念が生まれ，もしかしたら出来たかもしれない機能が実現される可能性が失われるとボードリヤールは言い，こうした商品化によって失われる機能性を「本当の《機能性》」と彼は呼ぶ。それは，自動性の増大ではなく，その周辺の不確定な部分，つまり柔軟な反応に対応した機能性である。

しかも，こうした便利さや機能への要望は次々に商品化され，我々の生活は瞬く間に便利なものに変わっていく。だが，そうした「機能性に優れた」機械がどのように動くのか，どんな原理で動いているのかについて，我々の多くは知らないし，知る必要もない。機械の中にある部品ひとつを取って，これは何かと尋ねられても，我々のほとんどは答えることが出来ないだろう。我々にとって「物はただ機能だけではなく，機能するという神秘も持っている」[5] のである。

同様に，曖昧な機能も増加する。携帯電話やコンピューターを使っていて，何かの拍子に新たな機能の存在を知った経験はないだろうか。あるいは，購入の際，訥々と説明されたものの，何がなにやら判らないまま一度も使っていない機能はないだろうか。こうした機能の多くは，使いこなすことが出来れば便利かもしれないが，実際にはなくても構わない機能である。場合によっては邪魔な機能ですらあるだろう。こうして，何かよく分からないが，とにかく動く，とにかくあるらしい，という機能が増えていく。そこでは，とりあえず動くらしい，動けば便利なのだ，新しい商品ほど機能的なのだ，という機能性という「記号」への盲信が働いているとボードリヤールは考える。

主観的な記号の場合も同様である。主観的な好みや愛着などによって物を購入したり収集したりする場合，我々はその物自体の機能によってそれを購入するのではない。それに付随した「古さ」「誰々の作品」などの属性によってそれを消費するのである。そこではやはり「本当の機能性」は脇に追いやられてしまっている。機能性への盲信との違いは，単にその価値を示す記号が，客観的にも保障されるか，主観的にのみ価値を持つかの違いにすぎない。

## 2　記号化と消費の理論

こうして，物が客観的，あるいは主観的な記号のもとに所有されるようになった社会を分析した後，彼はそれがより大きなシステムとして社会全体に影響を及ぼしていると考えるようになる。

### （1）記号化の進展

『消費社会』においてボードリヤールは，消費社会の秩序とは記号操作の秩序であると捉えた上で，こうした意味作用の論理や，「本来の機能」とは異なる記号のもとに物が生産され消費されるような現象が，現代社会では生産と消費の場に留まらず，ますます多くの領域へと拡大し，情報や意味，ライフスタイルなど，我々の生活のあらゆる部分に及んでいると指摘する。

例えば，我々が遠く離れた土地での悲劇をテレビを通して見る際，我々はまるでその場にいるかのように感じる。しかし実のところ，そこには切実な実感としての「本当の痛み」は存在していない。我々は自分自身を少しも傷つけることなく，苦しみ，悲しむことが出来る。テレビで地雷で足を失った人の傷口を見たとき，我々は「痛そう」だと思う。その傷口をみて顔

を歪め，その時の痛みを想像したつもりになる。だが，それはあくまでも「痛そう」なのであって「痛み」そのものではない。それにも関わらず「痛そう」だと思い，実際に痛みすら感じたような気になってしまうところに，ボードリヤールは記号操作の進展を見るのである。

例を変えよう。ある人は，楽しみにしていたサッカーの試合の直前に，テレビもビデオも壊れてしまった。仕方なく彼はラジオでそれを聴くことにした。だが，ラジオから聞こえてくる実況は，試合の状況を詳細に伝えてはいるものの，実況される「ナイスプレー」が実際にはどのような場面なのかが判らない。彼は今ひとつ状況を把握できず，折角の楽しみが台無しになったと感じる。だが，もしも友人の家などに行き，テレビを通してみたならば，彼はラジオで聴くだけの場合よりもずっと臨場感のある興奮を得ることが出来ただろう。それは，テレビが今，まさにその時に行われている情景をそのまま映像化しているからである。テレビの「機能性」は「臨場感」にこそあり，この「臨場感」という記号は真実以上の「真実らしさ」を増幅させながら拡大されてきたのである。

こうした記号化は，さらに「豊かさ」や「平等」などの概念にも拡大されていく。ボードリヤールによれば，現代社会に生きる我々は本当に豊かな時代に生きているわけではない。我々は単に「豊かさ」や稀少性などの記号のもとにおかれているだけである。彼によれば現代社会では「本質的なものはいつも必要不可欠なものの向こう側にあるとするこの象徴的価値の法則」[6]が浸透しているので，何か「余分な何ものか」という他と異なる機能を持っていれば，それは「固有のもの」として認められる。「機能性」の記号に置かれた物の場合は他社製品と違う機能，主観的な記号の元に置かれた物の場合は，自分が保有していないこと，古い物であることなどがその「余分な」部分である。だが第一に，機能性の記号に支配されたものは，主要な機能については画一化されてしまう。第二に，この「余分な」機能の部分は，本来の機能からすればなくても構わない部分でもある。さらに主観的な記号にとっての「余分な」属性はその物自身の特徴ではなく，主観的に付与されたものに過ぎない。こうしていつしか，我々はひとつの物を，機能性の記号や主観的な記号を通した姿でのみ見るようになった。しかも，こうした状況が今度は「豊かさ」や「平等」の概念にまで拡大される。「豊かさがひとつの価値となるためには，十分な豊かさではなく過剰な豊かさ」[7]が必要であるとボードリヤールは主張する。こうして「豊かさ」が一つの価値となった社会では，消費もまた，「豊かさ」という客観的記号のための消費となる。

（２）平等から差異へ

ボードリヤールによれば，元々「（消費が理想とする）幸福とは，まず第一に平等（あるいはもちろん区別）の要請」[8]である。だが，それはモノと記号によって計量することができる福利，すなわち物質的安楽でなければならない。つまり，消費における平等とは，誰が何を持ち，年に何をどれだけ消費するのか，という数値化可能な基準で計られねばならない。こうして，「すべての人間は欲求の前にそして充足の原則の前に平等である。なぜなら，すべての人間はモノと財の使用価値の前で平等だからである」[9]という理想の旗印の下，人々は平等を実現しようとする。だが，先にも述べたとおり，現代我々の周囲を取り巻いている物は，機能性や好

みなど，様々な記号というフィルターの掛かった商品である。そのうえにさらに，「豊かな人生のため」といった「豊かさ」や「平等」の記号が重ねられることにより，その物が持っていた「本来の機能性」はますます周辺へと追いやられてしまうことになる。「人々は決してモノそれ自身を（その使用価値において）消費することはない。」と彼はいう。「理想的な準拠として惚れ込んだ自己の集団に入会するにせよ，より高い地位の集団への準拠によって自己の集団から距離を置くにせよ，人々は自分を他者と区別する記号として（最も広義の）モノを常に操作している」[10] 事になる。だが，こうした一連の行為さえも，実は記号（コード）の支配下にあるのだとボードリヤールは指摘する。「消費者は自由だと思っているし，望んだものであると，他と異なる振る舞いであると思っているが，それがあるコードへの服従や差異化の強制であるとは思っていない」[11] と彼は言う。しかもこのコードの支配に従った差異化という行為を通して，個人は他人との本当の差異化を実現できないばかりか，この（記号的）差異の秩序の再生産のために利用されることになる。

しかも，表向きは平等の価値を実現するはずの，この豊かな社会は，実は不平等に基礎をおき，またそれを再生産する社会である。ボードリヤールによれば，あらゆる社会は社会的差異と差別とを生み出すものであるが，消費社会は特に富の利用と分配の上に成り立ち，豊かさとは切り離された（経済的）成長を通じて，成長の中で不平等が再生産される。「消費者の群」なるものは存在せず，いかなる欲求も「標準的消費者」などというものから自然発生的に生じることはない。彼にとっての欲求は，いかなる欲求であれ，記号による距離と差異化の維持という絶対原則によって上から下に浸透するものであって，決してその逆はない。「このように渇望の生産過程さえもが不平等なのである。下層階級の諦め（résignation），上層階級のより自由な渇望は，欲求充足の客観的可能性を倍加するに至るからだ」[12] とボードリヤールは指摘する。つまり，消費者の欲求は常にある種の「現実主義」にのっとっているので，個々の消費者は自由に欲求を抱き，充足しているかに見えて，実は自らの社会的地位に基づき，客観的チャンスよりも僅かに上の願望しか抱かない。大半の消費者の場合，それを遙かに上回るような欲望の多くは「分不相応」として合理的判断の名の下に諦められ，打ち捨てられる運命にある。こうした意味で，消費がもたらす平等は，実は記号と差異の社会秩序の中での相対的地位に基礎づけられた平等でしかないのであり，それぞれがその中で自らの地位に応じた消費活動を行うことによって，不平等が再生産されることになるのである。

こうした視点から，ボードリヤールは消費社会を次のふたつの根本的側面において分析可能となると述べる。第一の側面は，コードに基づいた意味づけとコミュニケーションの過程としての側面である。ここでは消費は言語活動と同様に言語＝コードに基づいた交換システムである。この側面は，コードに基づいて消費活動や様々な物などに意味が与えられ，その意味が共有されていく過程であるから，それは上記の平等化の過程に相当する。一方，第二の側面は分類と社会的差異化の過程としての側面である。ここでは記号としての物はコードにおける意味上の差異としてだけでなく，ヒエラルキーの中の地位上の価値として秩序づけられる。ここでは消費が戦略的分析の対象となり，社会的な意

味をもつモノとともに地位を示す価値として特定の比重を決定されるため，この側面は差異化と渇望の不平等の側面に対応する。しかもこの時点における差異化は，既にコードの支配下にある。そのためそれは，もはや「本当の差異」ではない。

こうしてボードリヤールは，欲求のシステムは生産のシステムの産物だという命題を呈示する。彼の言う欲求のシステムとは，欲求が消費力として，生産のより一般的な枠内での全面的処分力として生産される現象のことであり，生産の秩序は享受の秩序を否定し，すべてを生産力のシステムに再組織することによって，それに取って代わる。こうした中でシステムから個別に切り離された欲求などというものはほとんどなく，そこには欲求のシステムしか存在しない。あるいは欲求とは個人の水準における生産力の合理的システム化のより進歩した形態に他ならないと彼は主張する。

## Ⅱ　ボードリヤールと他者性

前章で示したように，消費社会は生産システムと結びついてひとつの欲望のシステム，不平等と記号的差異の再生産システムを形成する。ボードリヤールは，こうしたシステムの中で，現代の人間は他者を失い，他者性を失うという。では，この他者性，失われた他者とは何ものだろうか。

### １　ラディカルな他者性の発見

（１）モデルとコピー

記号化の問題を語る際，ボードリヤールはモデルとコピー（あるいはシリーズ）という語を用いて，その過程を説明した。『物の体系』における社会＝イデオロギー的体系がそれであり，また，『消費社会』における主要な論点でもあった。

彼にとってのモデルは完全な理想の形態である。それは持続的で安定した，絶対的な独自性であると捉えられる。人は豊かさや幸福，あるいは機能性を実現するためのモデルを思い浮かべるが，実際に生産され消費される商品はモデルそれ自体ではなく，モデルが大衆という概念を媒介として分裂，増殖したものである。「ある観念が理想であり得るためには，それが実現されていないことが必要」[13] だと彼は述べる。「モデル」もまた彼にとっては理想的な観念の一つの形態であるから，「新型モデル」として世に出る商品はその時点で既にモデルではないし，そもそも人は，本来の意味でのモデルなど本当に生産することなど出来ないと彼は考える。もし，仮に真の意味でのモデルを実現することが出来たとしても，それは完全な理想の形態である以上，変化やバリエーションを持たない。それぞれのモデルが絶対的な独自性を持って存在しまたは対立しているだけである。こうした物のみでは，消費は需要を進展させることができない。したがって実際に大衆へと向けて売り出されていくコピー（シリーズ）は様々なバリエーション，極微小な変化に分化している。それぞれはひとつのモデルの機能を分化し，細かなバリエーションとしているので，それぞれのコピーの内部にはいくらかのモデルの断片が残されているが，それはあくまでも断片であって，モデルそのものではないのである。こうしてコピーを機能や意味作用によって細分化していくと，そこに秘められたモデルは徐々に周辺へと追いやられることになる。

（2）ラディカルな他者性

マルク・ギヨームはボードリヤールとの対話の中で，以下のように述べた。「あらゆる他者のうちにはまず他人（autrui）がいる。――それは私ではない存在であり，私とは異質のものだが，私はそれを理解できるし，同化さえできる。だが，そこにはまたラディカルな他者性（altérité radicale）も存在していて，私はそれを理解できず，同化できないし，思いつくことさえできない。」[14)]

他者，ときいたとき，我々はそれを自己以外の人間と捉える。だが，ここで問題となっているのは，そうした意味での他者ではない。単に自己以外の人間存在を意味するのは「他人（autrui）」である。では，他者（autre）とは何者か。

ギヨームは他者性として，理解できない部分であるラディカルな他者性と同化を受け入れる他者の二者を仮定したが，ボードリヤールの場合，この二者を完全に違うものと認識する。前者は大文字の他者であり，人格の本来の「モデル」である。だが，それは各人を互いに対立させるほどに各人を個別化するものであった。ボードリヤールの言うところの「ラディカルな他者性」は，大文字の他者の死によって生み出された。個人をそれぞれ独自の存在となしていた外的な力（神）を失い，人間はそれぞれ同一の存在となってしまった。しかし，そこにはまだ神の代替としての「ラディカルな他者」が存在していた。「それは，魂や影や鏡に映った像のように，みずからの他者として主体につきまとい，主体が自分自身であると同時に自分にすこしも似ていないという状況をつくりあげ」[15)] ることで主体につきまとう。それは個々人にとって不透明な存在であり，ある意味では鏡像のように「私」についてまわる「運命」であるとボードリヤールは述べる。ラディカルな他者性の存在によって，個々人はそれぞれの特異性や独自性を保つことが出来た。彼によれば，それは主体自身の意識とは別に彼の内部に存在しており，彼の思考や行為に影響を与える。ラディカルな他者性は個人を一個の主体内において，自覚的な「私」との間で葛藤や対立を引き起こす。個人はいずれにしろ自らの行為や思考に付随する「ラディカルな他者性」に向き合わねばならない。しかしラディカルな他者性はボードリヤールにとっては一種の「モデル」であり，したがって実現されないものであるため，容易には理解，解明され得ない。ラディカルな他者との出会いはドッペルゲンガーの伝説が示すように，死を招くものであるとさえ，ボードリヤールは考える。また，ラディカルな他者性は，こうしてひとつの主体の内部で対立や葛藤を生み出すだけではなく，同様に内部にラディカルな他者性を抱えた個人同士の間にも対立や葛藤を生み出す。各個人はそれぞれラディカルな他者性によって特徴づけられているため，個人はその部分によって互いに対立し葛藤が生まれるのである。

しかし，ボードリヤールは「ラディカルな他者性」を主体や人格に関わるものとしてのみ考えていたのではない。この時期には，われわれを取り巻く世界にも，まだあらゆる他者性が残存していたと彼は述べる。つまり人種や狂気，貧困や死などが人間とその幸福や生命活動に対立し，葛藤を生み出すものとして存在していたと彼は考えるのである。しかし逆に言えば，こうしたラディカルな他者性は，その絶対的な特異性を保持することによって，たとえ対立や葛藤を引き起こしたとしても，他の何も

のにも侵されることのない聖性を保持していたのである。

## ２　近代化と合理的理性の発展

### （１）神の死と合理性

では何故「ラディカルな他者性」は失われたのだろうか。それを，ボードリヤールは近代合理性の進展と結びつけて考える。

そもそも，他者性は「神の死」によって，人間にとって重要なものとなった。近代化以前には，（キリスト教的）神が個々の人間に対して独自性を付与していた。だが，近代化によって，個人に独自性を付与していた宗教的権威が消えてしまう。そのため，各人はその代わりに「人格」という概念を生みだした。その人格の「モデル」は宗教的な倫理観を引き継いだ形で志向された。だが実際に彼らを特徴づけていたのは「ラディカルな他者性」だったのである。

「神の死」以降，西欧近代の合理的思想は，あらゆるものを合理性を通して理解しようとし，その結果として，合理的理性に対する非合理的なもの，曖昧なものが排除されてきた。合理的なものが数学や科学によって理解されうるものであるとすれば，非合理的なものは科学によっては理解されない，感情的なもの，曖昧なものということになる。法が作られれば，それにはまらない行為が犯罪であるとみなされるのと同様に，合理的なもの，合理性を絶対的な理性と考えるような思想が広まれば，必然的にそれにかみ合わないものは排除される。西欧近代は，合理性への信仰によって，非合理的なものを排除し続けてきたと彼はいう。同様に，西欧的な思想の根本にある「普遍的理性」「普遍的人間」という観念を，ボードリヤールは疑問視する。「この，普遍的なもの（l'Universel）という視点から，われわれは非人間的なものの枠の中に下位の諸人種を引き渡した（extrader）し，次に（M・フーコーが示したように）狂人，子ども，老人，貧者等々を引き渡してきた」[16] とギヨームはいう。

ボードリヤールもまた，西欧文化が生み出した「人間的なもの」と「非人間的なもの」という区別が，生みの親である西欧思想によって消去されようとしていると考える。「といっても，両者の対立を上位の概念へと綜合するのではなくて，差異化をなくす技術的抽象によって区別を塗り込める」[17] ところに，問題の端緒があるのだと彼はいう。こうして我々は，普遍的なもの，合理的なものの名の下に，実に多くのものを合理化，正常化してきたし，その枠に収まりきらないものを辺境に追いやってしまったと彼は述べる。

他者性の問題に関して言えば，この外へ向かう合理化の流れによって失われたラディカルな他者性は，人種や民族，貧困や死の問題である。医学は人間の幸福とその生命活動にとって脅威となる病気や死に対応するために発展した。また，政治経済，社会全体は不平等や差別の撤廃のために働いてきた。しかしボードリヤールは言う。「人種差別は他者（autre）が大いなる他者（Autre）であり，外国人（Étranger）が外国人（étranger）であり続ける限りは存在しない。だがそれは他者が差異をもつ存在となり，危険なほどに自己に接近するとき，存在しはじめる。」[18] ラディカルな他者性は比較すら不可能な絶対的な特異性であるから，そこには差異，すなわち二者を比較してその相違を認めるという概念が存在しない。だが，西欧近代の合理的精神は「差異の良い使用法」を信じていた。そこで彼らは自分たちの普遍的価値にもとづいて

それに対立し葛藤を生み出すものを差異の問題に還元しようとしてきたのである。こうして「未開人」を近代人へと啓蒙する作業にはじまり，人種問題，グローバリゼーション，経済問題などがおこった。それは確かに差別や階層などの問題に取り組み，「普遍的」な価値観のもとにそれらを統一しようとしている。だがそれは結局の所，各人種や各民族などの間にあるラディカルな他者性を無視し，単なる文化的，肉体的差異などの比較可能な差異のレベルで統一しようとしているにすぎず，問題の根本的な解決にはならないのだと彼は述べる。

（2）合理性の「内爆発」

しかし，合理化の方向は外へ向かうのみにとどまらなくなる。こうなると，「未開人」や「開拓地」を失った近代的な合理性は「未開人」に比べて合理的であったはずの「近代人」をさらに合理化する方向に進む。すなわち合理化はある一点で「内爆発」[19] を生じたのである。これにより，人間自身を知る試みが始まった。精神分析学や心理学が発達し，医学は人間の身体の未知の部分へと目先を向ける。無論，依然，外へと向かう合理化が終了したわけではない。だが，もはや，合理化の「外爆発」は以前ほどすべての科学の方向性にとって絶対的ではなくなりつつある。

一方，精神分析学や心理学の発達は，人間のほとんどの行為を「合理的」に説明しうるようにしてしまったし，人間の身体それ自体に関心を向けた医学はDNAを解析し，クローン技術を完成させようとしている。また，現実世界に飽きた人々は，ヴァーチャルな世界を作り出した。彼によれば，クローン技術は死や一個の身体への束縛を乗り越えようとしたものであるし，ヴァーチャルな世界もまた身体性からの解放や，自然や災害などの人間には完全に予測できない「不確実なもの」を乗り越えるために編み出された手段である。日常生活において我々はしばしば説明できない不合理な事象に出会う。死への恐怖感は多くの人に経験のある感情だが，それは死が生きている人間には決して自己のものとして経験できない現象だからである。また人は，ひとつの身体に拘束されていることを不自由に感じたりもする。天候に自らの行為が左右されることもある。西欧近代の合理性はそうした人間自身にはどうしようもない事象をすべて「不確実性」「非合理性」のカテゴリーに押し込んできた。そして，解明可能な事象は技術の進歩によって解明し合理化してきた。

だが，死や自然の突発的災害，人間の身体への拘束性など，残された解明できないもの，解明し定義してもそのジレンマから逃れられないものはどうしても残る。そうしたものに対し，合理化の進展は，今度はその代替物を作り出すことによって現実の不合理な世界と交換し，完全に合理的な世界を作り出そうとしているのだと彼は言い放つ。「自分より果てしなく『本当』らしい分身，現実世界より果てしなくリアルな世界への置き換えをつうじて，世界がみずからと交換される」[20] ことになるのである。しかしそれは実は，単に非合理的なもの，不確実なものを解明し理解しようとしていた時以上に，悪い結果をもたらすのである。なぜなら，死やその他，人間世界の最後の「他者性」の残滓を，こうした試みは合理的（に見える）代替物と交換することによって消去しようとするためである。しかし，機能的に整合した空間において，そこを利用する人間が唯一不整合な存在になるのと同じく，完全に合理化された世界では，そ

れを作りだした人間それ自体が非合理的な存在となってしまうのである。

他者性についても，同じことが言える。「西欧思想は絶えず他者〔＝同一でない存在〕を他人〔＝自己以外の人間的存在〕とみなし続け，他者を他人に還元しつづけている」[21] とギヨームは言う。本来「理解できず，同化できないし，思いつくことさえできない」他者の概念を，近代西欧の合理的思想は，植民地による同化，コミュニケーションによる相互理解等によって打ち消し，自分にとって理解可能な概念に置き換えることで他人に仕立て上げてきた，というのが，ギヨームにとっての他者理解である。

ボードリヤールの場合も，多少それとは異なるが思考の方向性は同様である。すなわち，本来ならば対立するはずの「ラディカルな他者」を「技術的抽象」によって塗り込めてしまうところに，「ラディカルな他者」の死を見ようとする。「ラディカルな他者は耐えがたい存在であり，皆殺しにするわけにもいかないが，かといって受け容れることはできない。したがって，取り引き可能な他者，差異の対象としての他者を成長させる必要がある」[22] と彼は述べる。ラディカルな他者性は，その絶対的な特異性によって，主体内部や主体同士など，あらゆるものに独自性を与える代わりに，対立をもたらす。そこで，西欧近代はラディカルな他者に対して，対立や葛藤をもたらすことなく個々の主体を区別する差異の概念を生みだし，それをもってラディカルな他者性と交換したのである。そうして「今日では，すべてが差異の言葉（ランガージュ）で語りあっているが，他者性は差異ではない。差異こそが他者性を抹殺すると考えることさえできる」[23] と彼は考える。差異は確かに各人を区別することが出来るかもしれないが，その区別は，外見や趣味，性格などを比較し，その違いを示すものに過ぎない。だがラディカルな他者性はもっと根本的な特異性でありまた「モデル」でもあるので，比較することすら出来ない。だがそうした特性を持つラディカルな他者性の存在に目をつむり，区別の問題に関して言えば，個々人や人種などを，目に見え比較できる単なる差異の問題に還元してしまったことによって，他者性は剥奪され，失われることになったのである。

（３）欲望の「内爆発」

こうしてラディカルな他者性は失われた。しかし社会形態が消費社会へと移行したことにより，状況はさらに悪化する。こうした過程を二つの段階にわけて考えると，これまで見てきたラディカルな他者性の喪失に至る部分を第１段階，そしてその喪失から始まる段階が第２段階と分けることができる。

第１の段階では，神に代わるものとして「ラディカルな他者性」が生み出された。近代以前，人間は神のうつし身だと捉えられていた。ボードリヤールがいうところの「他者」とは，この神，すなわち大文字の他者に他ならない。彼によれば，近代以前，人は神というモデルのコピーとして，モデルの断片を内包していた。それによって人は各々の絶対的な独自性を保っていた。だが，神の死によって個人を特徴づけていたその断片が失われ，そこに代わる「他者」を入れ込もうとして，人は「人格」という概念を見出した。だが，それは神の外形を模したものでしかなかった。実際に個々人やあらゆる人種，階層，そして人間と死との間を区別していたのは「ラディカルな他者性」だった。主体と人格の問題について言えば，ラディカルな他者性はおそらく近代化の以前から個々の主体を特異な

存在にすることに寄与してきたし，それによって一個人の内部の葛藤や他の人間との対立を生みだしていたし，また，様々な人種，民族の間にも絶対的な対立をもたらしていた。だが，このラディカルな他者性は，西欧近代の「普遍的」価値観のもと，問題を解決するために差異の問題へと還元され，失われてしまった。

続く第２の段階では，「ラディカルな他者性」は既に失われてしまっている。しかし，個々人を区別するものとしての「人格」への希求は残っている。ここで人間が志向する人格は，観念的な意味でのモデルである。だが実際に人間が手に入れたと考える人格は，単なる差異への欲求であり，生産されたものにすぎない。「モデル／シリーズの図式（le schème）が作る必然的で動的な物のコンテクストにおいて，今日の消費者の心につきまとっている（hanter）ものこそ，人格の完成への真の強制」[24] であるが，ここで人格を決定するものは，観念的な道徳でも倫理でも，ましてや宗教性などではなく，単に周囲との差異化に結びつけられた「個性化」の問題でしかない。しかも，記号化の進んだ消費社会では，こうした「《特殊な差異》は，産業的に生産されるので，主体がなし得る選択は初めから固定されている（pétrifier）。残るのは，ただ個人的な区別の幻想だけである」[25] ため，豊かさや貧しさ，痛みなどが記号化したのと同じ行程を経て，人格もまた，ひとつの商品，ひとつの記号として生産されるようになる。だが，一度記号として人格が生産され，消費されるようになれば，それは「本当の機能」を駆逐してしまう。こうして，人格という概念そのもののモデルに対し，個々人が獲得する，あるいはしようとする人格は外形を模し，さらにその型のなかに画一化された記号としての人格となる。「内面の他者性を失って，この主体は終わりのない自己同一化を定められている」とボードリヤールは言う。人格の問題について言えば，ラディカルな他者性は一個人の内面に葛藤や対立を引き起こすが，それ故に個人は自らのラディカルな他者性と向かい合わずにはいられない。だが，もはやラディカルな他者性が失われてしまったこの段階において，個人はもはや自らの行為や思考につきまとう不透明性を失い，透明な存在となったとボードリヤールは考えている。自らの内面が透明になってしまった個人には，もはや葛藤や内面の対立がない代わりに，自他の明確に区別されたイメージもない。それ故に，諸個人はより一層自分自身の明確なイメージを求めるようになってしまう。こうして，「自己同一性は，悲壮な不条理を伴う夢となる。一切の特異性を失ったとき，ひとは自分自身を夢見て，みずからを確認しようとする」のだが，人間は「もはや自分が誰だかわからなくなって」いる[26]。もはやラディカルな他者性を失った個人は二重性の中にいないので，そこに「本当の自分」を見いだすことはできないのである。「なぜなら，二重性のなかにしか，ラディカルな他者性は存在しないからだ。他者性は，単一者と他者の曖昧な弁証法ではなくて，取り消せない原則の中で構築される。二者対立的な二重性の原則がなかったら，あなたは幻影としての他者性しか見つけられないだろう」[27] と彼は述べるのである。そこに見出される幻影としての他者性は，もはやラディカルな他者性ではなく，したがって，他の何ものにも侵され得ないような聖性はそこにはもはや存在しない。

## III　消失する他者

### １　スペクトルな他者

（１）幻影的スペクトル性

さて，こうした他者性にまつわる議論の中で重要な位置をしめるのが，「スペクトル性」という表現である。

ギヨームはスペクトル性をその言葉の意味から二つの領域に分けた。すなわち「幻影的スペクトル性（la spectralité fantomatique）」と「プリズム的スペクトル性（la spectralité prismatique）」である。前者は「おぼろげにかすんで，亡霊か幻影のようになった現実」をさす。後者は「拡散した様々な構成要素を見かけ上の統一体に置き換える，あの白色光線のスペクトル」である[28]。まず，匿名性によって，身体や固有のアイデンティティという物から解放されることによって，現実感が希薄なものになる。それにより，身元確認の作業から解放された人間は様々な部分に分化し，分裂することができるのである。ギヨームの理解では，スペクトル性はこのように，第一の意味の効果から第二の意味へと進行するものであった。

だが，ボードリヤールの場合，この二者に対する見方が大きく異なる。ボードリヤールはまずこの二者を「亡霊やエクトプラズマのスペクトル」と「『個人』の内面の異なる面の屈折」と定義した。彼によれば前者は「エクトプラズマであり，イドの背後にひそむ分身であり，君自身につきまとうことになるまったく特殊な他者」である[29]。つまり，それは個人の欲動やそれに伴う行為の背後につきまとう不可解な部分である。たとえば，ある種の強迫神経症などの場合，自らの望む望まないに関わらず，ある行為やある脅威が常に彼について回る。我々の場合も同じことで，無意識に行動してしまった後で，「どうしていつもこうなのか」と後悔した覚えは誰にでもあるだろう。このような，行為している本人にすらその理由がわからず，ただ強迫的にその人の行為，その人の思考について回る部分を，ボードリヤールは「幻影的スペクトル性」とする。その一方，「プリズム的スペクトル性」を彼は「異なる役割や面において個人が減数分裂（démultiplication）をつづける場合」であるとする。こうした立場をとるボードリヤールにとって，これら二つのスペクトル性は，ギヨームのように一方から他方が生じるというような関係にはない。むしろこの二者はまったく異なるものである。

ボードリヤールのいう「幻影的スペクトル性」の場合，それは個人の行為につきまとう「まったく特殊な他者」であるから，個々人は自らの行為につきまとう自分自身にもわからない部分を内包していることになる。したがって，この種のスペクトル性はラディカルな他者性に対応することになる。それによって，我々は他の人間とコミュニケーションを交わすときに，我々は誤解や思いもかけない原因による対立，訣別などを経験することになる。したがって，こうした「幻影的スペクトル性」あるいは「他者性」は，「結合の解除」と結びついているということになる。だからこそ彼は「他者性」について「他者，他者性は二者対立型の関係でしか私とかかわることはない」[30]といい，「ひとりひとりの存在は，こうした二重の傾向の結果となる。つまり，個別的ではなくて二者対立的な形態なのだ」[31]と述べるのである。個々の人間は，自覚的で他人からも確認される「私」と他人はおろか，自分自身にすらわからない何ものかである「他者性」という二つの部分を持っているが，

それぞれは独立して存在するのではなく，視認できる「私」の背後にひっそりと「他者性」が重なるという形式で存在している。自覚的な「私」は自分自身にも理解できない行動をとる「他者性」の部分と向き合わずにはいられないのだが，それを単なる差異へと還元し続けてきた結果，ラディカルな他者性を失った人間は「自分自身の多様性と複雑性，自分自身のラディカルな差異，自分自身の他者性と正面から向かい合えなく」[32] なってしまった。そこにはもはや「幻影的スペクトル性」はなく，その代わりに「プリズム的スペクトル性」が現れる。

（2）プリズム的スペクトル性

一方，「プリズム的スペクトル性」の場合，個人は「もはや何ものかにとりつかれ（être habité）てはいない」[33]。「幻影的スペクトル性」の場合には，個人は自らの内部から染み出してくる何ものかにとらわれていたが，「プリズム的スペクトル性」の場合，個人はそういったものから完全に分離し，その外部に存在することになるので（あるいはそれを外部に追いやったといえるかもしれない），自らの内にある得体の知れないものにつきまとわれているような強迫観念をもはや抱くことはない。むしろ，彼らは自らをある行為，ある思考につなぎ止め，束縛するものを持たないので，多様な役割や面において「減数分裂」する事が可能になる。こうした状態では，個人は「多様な分岐の総体」として現れるので，個人間の結合はもはや解除されることはない。なぜなら，各個人はその面において結合している相手と対立したり訣別したりする原因を持たないのである。同様に，個人の内部においても，自覚的な「私」と「他者性」との対立は生じないので，個々人は強迫的な葛藤を感じることもなく，自分自身の内面の分裂を感じることもないのである。

こうした状況を彼の他者性論に当てはめると，以下のようになる。まず，元々個人の内面には宗教的倫理に基礎づけられた「大文字の他者」が存在した。しかしそれは，神の死によってそれを模した「ラディカルな他者性」にかわることになる。この他者性は，この時点ではまだ「幻影的スペクトル性」をもって，個人を縛りつけるものだった。だが近代化の進展，記号化の進展によって，それは徐々に個人の内から失われた。そうして，いつしか個人は「プリズム的スペクトル性」のもとで「多様な分岐の総体」として行為するようになったのである。そうしてとうとう人は「他者性のようなもの」を人為的に生産するに至るのである。この過程は『物の体系』で物がそのものの「本当の機能性」ではなく，機能性や記号によって消費されるように変化したのと同様の過程である。

物が記号化した機能性によって消費されるようになって，それ自身を一つの機能に限定し，束縛しなくなったように，人は自らの行為につきまとい自らを規定的に束縛する「ラディカルな他者性」を手放して，様々な役割に分裂できるようになった。

機能性を重視した物の消費によって，その空間が一つの役割に限定されなくなったように，人も一つのアイデンティティに固定されることはなくなった。

だが，機能性を追求した物が商品化することによって「本当の機能性」を失ってしまったように，「多様な分岐の総体」となった個人は，自らのうちに秘められていたかもしれない自らの能力や思考，欲動を失った。個人の機能はただ多くの面に分裂し，多様な役割と結合できる

ことに限定されてしまった。

機能性の追求が最後には曖昧で必ずしも必要のない機能ばかりを生み出していくように，多様な役割に分裂した個人は特別に結合する必要のない面とも結合しようとして，必要のない役割にまで分裂する。

同様に，記号化された物が他社製品との区別化をはかろうとして，機能や値段の点では大きな違いのない，ただ形や色が違うだけのシリーズを次々と生産するように，「他者性」を失って同質となってしまった個人は服装や趣味などの「オプション」によって自らを差異化しようとし始めた。だが，それは単なる差異でしかなく，個人を本当に特徴づけるのは我々が手放した「ラディカルな他者性」だったのである。

最後に，記号化された物が指向する「意味」がいつしか「内爆発」によって人格や個性化を商品化しはじめたように，ラディカルな他者性を失った人間はとうとう，自分自身を他人と区別し個性化するために「本当の自分」を探しはじめたのである。そうして「多様な分岐の総体」となった個人は，「幻影としての他者性」を「特性のない生き方のラベルとしてのアイデンティティ」として身につけるのである。ここに，先に述べたボードリヤールの他者性の第２段階が現れる。すなわち，もはや「ラディカルな他者性」を失い，ただ個性として「他者性」を求めるようになった人間は，産業的にシミュラクルとしての差異や他者性を生産するようになる。

## ２　ラディカルな他者性の復讐

### （１）復讐するラディカルな他者性

西欧的な思想に基づいた合理化の進展は，様々な科学を発展させた。しかしその一方，「非合理的なもの」や「人間的でないもの」を合理化の流れの中において異質性を認めることなく同化させてきたことの矛盾がここにきて目に見える形で現れ始めた。こうした動きをボードリヤールは他者性の復讐と呼ぶ。

まず，多様な民族的文化の相違をことごとく「合理化」してきた結果として，民族紛争などが活発化することになる。西欧は「未開社会」を次々に啓蒙し，「近代化」させていこうとした。しかしそれはラディカルな他者性の存在を認めつつ，共生の方策を模索しようとするものではなく，むしろ西欧的文化を背景として西欧思想をこじつけ，西欧と比較した差異の問題を認めることでしかなかった。各民族，各文化が持っていた他者性を合理性の名の下に同化し，単なる差異としてしまったことの矛盾が，ここにきて噴出し始めたのである。「あらゆる特異性（人種・個人・文化）は，自らの特異性を死滅させるという代償を払って，単一の権力に管理される世界規模の流通過程を定着させてきたのだが，いまやテロリズムによる状況の転移によって，復讐を遂げようとしている」[34] と彼は言う。

無論，「近代化」以前にも，民族同士の対立は生じていたが，それと近代以降の民族紛争との違いは，後者は「人間的なもの」という観念が介入している点であるといえるだろう。西欧文化の模倣による「近代化」を経験する以前の民族対立との違いは，第一に，かつてのそれは，敵を取り込み自らと同質のものにしようとはしなかった点，そして第二に，「人間的なもの」という観念の存在である。彼が言うように，「人間的なもの」と「非人間的なもの」の区別が結果として「人間的なもの」への「非人間的なもの」の同化，そしてその消失を促したと考

えるのであれば，「人間的なもの」という観念の内在化された社会における対立もまた，「人間的なもの」の観念に支配されていると考えることができるだろう。

民族問題だけではない。医学の発展によって駆逐されたはずのウイルスは，より強力になって復活し，死の乗り越えという幻想のために生み出されたクローン技術は，クローンとして生まれた個体の老化の促進や障害をもたらしている。このような形で，近代化の過程で排除されてきたラディカルな他者性は復活し，「復讐」しようとしているのである。

（2）他者性は失われたのか

以上の通り，ボードリヤールは彼の当初の問題関心であった消費社会における記号化の問題を，西欧近代以降の合理性や現代の科学技術が人間や人間を取り巻く世界から非合理的なものや不確実なものを取り除いてきたことによる「他者性」の喪失問題へと発展させた。彼は近代以降の西欧社会を中心とした合理化の進展こそが問題なのだと述べる。合理化の進展こそが，個々の人間から「他者性」を奪い取り「多様な分岐の総体」としてしまった。しかし，すべてを「合理化」し，非合理的なもののカテゴリーに当てはまるすべてのものを合理的なものへと同化しようとする試みは大いなる矛盾をはらんでいる。「本当の差異」や異質性を認めることなしにそれを実行すれば，内部から矛盾が吹き出すことになるだろうし，完全に合理的な世界を作り出してそれと交換しようとすることは，そもそも問題から目をそらし，ごまかしているにすぎないのである。とはいえ，そうした「合理的」世界に生きている個人は自らの行為がそうしたシステムの中に取り込まれているという自覚を持っているわけではない。個々の科学者は死を乗り越え，不合理なものである死を世界から排除しようとしてクローン技術を研究しているわけではない。個人は他者性を失ったことを自覚しながら「本当の自分」を探しているわけではない。だが，我々の社会からあらゆる非合理性，不確実性，他者性は失われたとボードリヤールは主張する。彼は，西欧近代が作り出してきた合理化によって完成される社会という思想それ自体が幻想でしかなかったと考える。合理性を機軸と考えるからこそ，不確実なものや非合理的なものは不安を呼び，排除され無視されることになる。したがって，逆に，不確実性こそを機軸に据えることができれば，「不確実で非合理的な世界」の整合性は取り戻されるのだと彼は言う。

だがそれは一種の逆説に陥ってはいないだろうか。不確実性を機軸にした世界では，合理性は排除の対象とならないのだろうか。それすらも不確実性の一部として許容される世界を彼は思い描いているのだろうか。また，たとえその点を肯定したとして，すでに失われた他者性やその他のものは再生するのだろうか。それともすでに失われたものはそれとして，現代にも残存し，新たに出現しようとしているいくらかの非合理性，不確実性が中心となるのだろうか。これらの点に関する議論が行われない限り，彼の理論の正当性を完全に認めることはできない。

だが，彼が指摘するように，我々は記号的な意味作用を持ったものを購入するし，現代人が以前よりも表面的な対人関係を持ちながら，「本当の自分」などの人格への欲求を募らせているという提言はリースマンをはじめとした多くの社会学者によってなされている。そうした現代的な事象のすべてを，一つの理論を発展さ

せることによって説明したところに，ボードリヤールの意義はある。モノの機能や意味作用が表面的な「単なる差異」の問題に還元されてしまったという視点を，人間や世界全体に対して応用したところに，彼の驚くべき一貫性と，その重要性が見いだされるのである。

とはいえ，こうした状況をいかに打破するかを考える必要がある。ボードリヤールは近代の延長として現代を捉える見方に疑問を呈示する。彼は，近代化そのものを否定するわけではないが，近代的な価値を未だに温存することを疑問視し，新たな視点と価値の導入を提起する。しかもそれはいわゆるポストモダン的な立場とは異なる立場に立ったものである。ボードリヤールが主張する新たな視点とは，近代の延長としての現代的な価値を温存するものでも，また近代的な価値を崩すために敢えてバラバラな言説を打ち出そうとするポストモダニズムとも異なる。彼の立場はただその時々の現実の様相をありのままに認識することから始まる。現状を先入観無しにありのまま認識し把握することによって，読み解こうとするのが彼の立場なのである。

だがそれを検証する前に，そもそも，他者性とは一体何なのか，という当初の問いに立ち戻ろう。彼がこの概念を最初に提出したのは，1990年に書かれた『透きとおった悪』だった。だが，これまで見てきたとおり，彼がこの概念を提出したことは，彼の問題意識の一貫性とその発展の過程を辿れば，必然であったといえるだろう。処女論文『物の体系』の中で彼は，ガラスは理想の現代的容器であると述べた。それは，ガラスの持つ透明性によるものだった。今，彼は「ラディカルな他者性」を失った個人が自らの不透明性を失って透明な個人となってしまったと述べる。その結果，「多様な分岐の総体」となった個人に葛藤は生じないと彼が述べるのは，こうした個人の場合，自らの内面も他人の内面も全て見通せるためである。だが，『物の体系』で彼は，内容を全て見通せる透明性とともに，ガラスは断熱性を持って，外から与えられる熱に抵抗することを示唆している。しかも，透明でありながらも，ガラスはその内と外を確実に隔てているのである。その意味で，ラディカルな他者性を失った個人は互いに内面を見通せる透明性を持ちながらも，実はラディカルな他者性を保持していた頃よりもその透明な内面を強固に閉ざしていると考えることもできるのではないだろうか。そうすると，ラディカルな他者性を失って多様な面や役割に分離し，様々な相手との結合を可能にしている「多様な分岐の総体」としての個人は，その内面的な部分については，透明性ゆえに傷つきやすくなっているとも考えることができる。透明になった個人同士は，透明性ゆえに互いに葛藤を生じることはなく，時折現れる不透明な他者からも，透明なガラス容器によって守られている。ボードリヤールはラディカルな他者性は二重性の中にあると示唆したが，こう考えると，他者性を失った個人もまた，透明なガラスの中の透明な個体としての二重性を持っているといえる。この点については，今後考察していく必要があるだろう。

さて，ボードリヤールは「ラディカルな他者性」を失った個人は，もはや自分が何者かが解らなくなっていると述べる。それは透明なガラス容器の中に密封された空気や水の違いが解らないようなものである。透明性ゆえに個人は自分自身の内面を見通すことができる。その意味では確かに個人は「終わりのない自己同一化」にさいなまれる。だが同時に，そこには，自分

自身の特徴となりうる濁りや不純物が存在しない。だからこそ，こうした個人は他人との区別を夢見るし，ラディカルな自己同一性を夢見るが，結局の所，既に彼らの自己同一性，彼らの差異は，ガラス容器に貼られた「ラベル」の差異にすぎないのである。だが，本当にラディカルな他者性は失われてしまったのだろうか。

現代日本の若者たちが「自分らしさ」の名の下に単なる記号的差異でしかないファッションや流行を身につけているのも事実である。そしてそうした若者たちの関係が希薄で，葛藤を生じない「やさしい」関係となったと言われてから既に十年が経過している。だがその一方で，社会的活動に積極的に参加することで「自分探し」を行おうとする若者たちがいることもまた事実である。彼らはいずれも「自分探し」に奔走しているが，流行を追い，友人との「やさしい」関係の中に「居場所」を見つけようとする。こうした若者の行為と，奉仕活動などを通して自らの将来を見つめようとする若者の行為は果たしてまったく異なるのだろうか。これらの点については，問題を示唆するに留め，本論は終わりたいと思う。

## おわりに

これまで見てきたとおり，現代社会においてボードリヤールはラディカルな他者性がすでに失われてしまったと警告する。しかし，それはまだ完全には失われていない。それは失われつつあるし，現実に現代の人間はより表面的な関係を保持するようになってきている。だが，それはまだ始まったばかりなのである。ボードリヤールが危惧する状況に至るにはまだ若干の時間的余裕が残されているし，また無論，ボードリヤール一人の理論では読み解くことのできないほかの要素も存在している。こうした他の理論を無視して通ることはできない。本論では触れることができなかったが，ボードリヤール研究者の多くは彼の業績を批判的に読みながらも評価している。彼らの分析を利用することでより一層，彼のいわんとするところも明確になっていくだろう。

現代の日本社会に生きる若者達の人付き合いのあり方，そして彼らのアイデンティティのあり方を，これまで見てきたような他者性論を持って分析することが本論に続く筆者の課題である。ラディカルな他者性とそれが失われゆく過程，そしてそうした状況に置ける問題について理解を広げることによって，現代の若者たちの行為に対する問いやそれについての分析はより明確なものとなるのである。

### 注

1）　Gane, 1991b, pp.3
2）　松井剛はその原因として，80年代にボードリヤールを積極的に取り込もうとした「進歩史観的消費論」はボードリヤールの理論そのものとは明らかに矛盾するものであったにもかかわらず，その矛盾を見過ごしてきたことにあると述べる。
3）　Gane, 1991b, pp.4
4）　訳文では「機能体系」とされているが，原文の意を解りやすくするため，本論では「機能的体系」と訳した。
5）　Baudrillard , 1968 pp.163＝1980 pp.143
6）　Baudrillard, 1970 pp.51 ＝ 1995 pp.42
7）　同書pp.52＝pp.42
8）　同書 pp.60＝pp.49
9）　同書 pp.61＝pp.50
10）　同書 pp.79＝pp.68
11）　同書 pp.80＝pp.68
12）　同書 pp.84＝pp.72

13） ボードリヤール・吉本隆明，1995，pp.111
14） Baudrillard, J. et Guillaume, M., 1994 pp.10＝1995 pp.4
15） Baudrillard 1990 pp.119＝1991 pp.152
16） Baudrillard, J. et Guillaume, M., pp.12＝pp.7
17） Baudrillard, 1999 pp.52＝2002, pp.57
18） Baudrillard 1990 pp.133＝1991, pp.172
19） 「社会の外へと欲望の拡大が生ずる資本主義を，欲望の『外爆発』と呼び，社会の内へと欲望の拡大が生ずる資本主義を，欲望の『内爆発』と呼んでおこう。」（佐伯啓思『「欲望」の資本主義』，講談社，1993 pp.158）元々はマクルーハンの語だが，佐伯啓思は以上のように限定した意味で用いている。
20） Baudrillard, 1999 pp.25＝2002，pp.25
21） Baudrillard et Guillaume, 1994 pp.10＝1995 pp.4
22） Baudrillard 1990 pp.138＝1991 pp.178
23） 同書 pp.131＝pp.169
24） Baudrillard , 1968 pp.213 ＝ 1980 pp.188
25） 同書 pp.213-214＝pp.188
26） Baudrillard, 1999 pp.72＝2002，pp.80
27） 同書 pp.127＝ pp.145
28） Baudrillard et Guillaume, 1994 pp.33-34＝1995 pp.32
29） 同書 pp.37＝pp.36
ここにおける「君」とは，対話者であるギョームを指す。
30） Baudrillard 1999 pp.85＝2002 pp.96
31） 同書 pp. 107＝pp.122
32） 同書 pp. 46＝2002 pp.51
33） Baudrillard et Guillaume, 1994 pp.37＝1995 pp.36
34） ボードリヤール 2002＝2001, pp.40

## 参考文献


Mike Gane, *Baudrillard's Bestiary : Baudrillard and Culture*, Routledge, 1991

——, *Baudrillard: Critical and Fatal Theory*, Routledge, 1991

Edited by Chris Rojek and Bryan S. Turner, *Forget Baudrillard?*, Routledge, 1993

Jean Baudrillard, *Le Système des Objets*, Edition Gallimard, 1968（＝ボードリヤール,J., 宇波彰訳『物の体系』，法政大学出版局，1980）

——, *La société de consommation, Ses Mythes, Ses structures*, Edition Denoël, 1970（＝ボードリヤール，今村仁司・塚原史訳『消費社会の神話と構造』，紀伊国屋書店，1995）

——, *Transperant du Mal*, Galilée,1990（＝ボードリヤール，塚原史訳『透きとおった悪』，紀伊国屋書店，1991）

——, *L'Echange impossible*, Galilée, 1999（＝ジャン・ボードリヤール，塚原史訳『不可能な交換』，紀伊国屋書店，2002）

Jean Baudrillard et Guillaume, M., *Figures de l'altérité*, Descartes et Cie.,1994（＝ジャン・ボードリヤール＆マルク・ギヨーム，塚原史・石田和男訳『世紀末の他者たち』，紀伊国屋書店，1995）

ジャン・ボードリヤール，塚原史訳「テロリズムの精神」『環：歴史・環境・文明』８，2002，pp.37-51＝Baudrillard, 'L'esprit du terrorisme', *Le Monde* du 3 novembre 2001

ジャン・ボードリヤール，吉本隆明『Ｊ.ボードリヤール×吉本隆明　世紀末を語る；あるいは消費社会の行方について』，紀伊国屋書店，1995

ボードリヤール・フォーラム編『シミュレーションの時代：ボードリヤール日本で語る』JICC出版局，1982

佐伯啓思『「欲望」の資本主義：終わりなき拡張の論理』，講談社，1993

——『「シミュレーション社会」の神話：意味喪失の時代を切る』日本経済新聞社，1988

松井剛「消費論ブーム：マーケティングにおける『ポストモダン』」『現代思想』第29巻14号，2001　pp.120－129

# Jean Baudrillard's theories and the alterity: A Consideration of the Problem of the Lost Alterity

FUJII Yuuki＊

**Abstract**: Jean Baurdrillard's theories were eagerly taken up in discussion of the consumer society in the 1980s. However, they were put aside in Japan after the 1990s. At first in Japan, his theories had taken up only fragmentarily, and were not criticized and nor appreciated sufficiently. Recently, he shows us his remarkable unity from his first standpoint, and he refers to an essential problem in modern society. His first point of view was a problem of the alienation of the human being and of the objects in the highly consumer society under the control of signs. At that time, he said that the objects were brought under the sign's rule, and abandoned their proper role and meaning for the consumption. Today, in a society that has made progress in rationalization, and has produced the technologies of the clone and the virtual world, he cautions that the human being is going to abandon all his discords and all his irrationalities through the same way that the objects passed down. This essay will be helpful to consider what is happening in our modern highly- rationalized society, based on the point of view of his concept of "Alterity".

**Keywords**: radical alterity, spectral, implosion, rationalization, symbolization

＊Graduate Student, Graduate School of Sociology, Ritsumeikan University